

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520146

研究課題名(和文)映像作品における女性像「プリンセス」と「戦う女性」にみられるゴシック性の研究

研究課題名(英文)A Study on the images of the "princess" and "fighting woman" with the Gothic elements in American films, animations and TV dramas

研究代表者

照沼 かほる (TERUNUMA, Kaoru)

福島大学・行政政策学類・准教授

研究者番号：60312766

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アメリカにおいて19世紀からさまざまな形で展開される「少女・女性の成功物語」を、ゴシック的要素と結びつけることで、「プリンセス(願望の)物語」と位置づけ、それをを用いることで、アメリカの映像作品に描かれる「プリンセス」と、一見それとは対照的とみなされてきた「戦う女性」が、ともにゴシックの呪縛を帯びた、共通の矛盾・問題点をはらんでいること、またそれが広くアメリカ文化に浸透しつつづけている女性像の問題と結びついていることを、アメリカの映像作品の分析を通して、論じるものである。

研究成果の概要(英文)：When the success stories of girls/women, which have variously developed in American culture since the early 19th century, are considered in relation to the Female Gothic elements, it is revealed that the two seemingly contrasting images of girls/women, the image of "princess" and that of "fighting woman," are connected with each other and have in common the problems and inconsistent ideas spellbound by the Female Gothic.  
This study aims to discuss it through the analysis of films, animations and TV drama series concerning the "princess" and "fighting woman," and to show the problems these works disclose are widely permeated in contemporary American culture.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文化 映像文化 ゴシック文学 ジェンダー アメリカ文学 女性像

## 1. 研究開始当初の背景

アメリカの19世紀ゴシック文学に関する研究を行っていく中で、従来「ゴシック」とは見なされてこなかった、あるいは別の範疇に括られていた作品や、いわゆる「少女小説」など、ゴシック文学と関連させて考察すべき作品が多数あることがわかった。殊に19世紀に少女・女性たち向けに書かれ、かつ彼女たちの人気を博した「女の子のための立身出世物語」といえる小説群「良妻賢母になることを是とする物語」や、主人公が苦難を乗り越えて結婚という幸せを手に入れる物語に、ゴシック的要素が多く見受けられ、女性ゴシック小説との共通点が多い。

一方、現代の女の子たちは、ごく幼少の頃から「プリンセス(願望の)物語」に囲まれて育ち、「プリンセス(のような女の子)になること」への願望を自然に受容している状況がある。「今時のプリンセス」は、待つばかりではなく、自立した強い女性でなければならず、かつ「プリンセス」あるいは「玉の輿」を目指すには、大変な努力を要するという「現代的な」設定となっているが、これは見方を変えれば、努力すれば「プリンセス」という理想像になれる可能性があるということであり、アメリカのアニメーションを代表するディズニーの近年の「プリンセスもの」(続編やパロディものも含む)の変貌にもそれは表れており、アメリカという国が誕生以来、常に国民に鼓舞してきた「成功物語」と酷似した仕組みになっている。19世紀の女性のための小説にも通じる、それはまさに「女の子版の立身出世物語」である。

現代において女性の「成功物語」「立身出世物語」としてすぐに浮かぶ女性像は、「戦う女性」であろう。アクション映画の中で、「主人公」となって「男性並み」に強く逞しく戦う女性はもちろんのこと、男性中心社会の中で頑張る「働く女性」も、現代の象徴として描かれるようになって久しい。だが、女性たちは一面では社会進出を果たし、選択の自由も得つつあるが、男性中心の社会における女性の立場は、依然として問題や矛盾を抱えている。その一端を担っているのが、女性に課せられた恋愛至上主義である。

「幸せな結婚」あるいは「恋愛パートナーの獲得」は、「女の子の立身出世」のわかりやすいゴールであり、女性のための物語の大半に描かれている。一方、ゴシック小説の多くにも、結末にヒロインの「幸せな結婚」が用意されている。苦難を乗り越え、ゴシックの恐怖の世界から抜け出し、その結果「幸せ」を手に入れるという構成は、ゴシック版の女性の成功物語の体裁を取っている。そして、ゴシック作品において、社会に都合の悪い部分・制御できない矛盾

として、「勸善懲悪」の力業で排除・隠蔽しようとするゴシック的な(かつ多くの場合、女性嫌悪的な)悪は、本来は玉の輿という、「他力本願の成功」を努力によって女性たちに勝ち取らせようとする「プリンセス願望」のもつ矛盾点、そして「戦う女性」の戦う目的に表れる矛盾点と、大きな共通点があるように思われる。

少女小説や家庭小説の分野では、第二波フェミニズム以降の、女性作家作品の再評価の流れに乗って、多くの作品がさまざまなアプローチで論じられてきている。しかし、「扇情小説」とゴシックが結びつけられることや、「家庭小説」のゴシック性が論じられることはあっても、「少女小説」や女性の成功物語におけるゴシック性が論じられることは、これまでなかったように思われる。よって、それを基に「プリンセスもの」や「戦う女性もの」の映像作品を論じることは、新しい試みと考えられる。特に「戦う女性」は、逃げ惑うゴシック・ヒロインとは正反対とみなされることはあっても、共通の問題をはらむものとしては論じられてきていない。

以上のことから、女性の成功物語を「プリンセス(願望の)物語」とみなし、かつ「戦う女性」を強く逞しくなった「プリンセス候補」とみなし、19世紀の小説から現代の映像作品に至るまでのより幅広い「女性のための物語」を、ゴシック性というフィルターを通して見るという研究は、非常に有意義なものであると考える。

## 2. 研究の目的

本研究は、アメリカにおいて19世紀からさまざまな形で展開される「少女・女性の成功物語」を、ゴシック的要素と結びつけることで、「プリンセス(願望の)物語」と位置づけ、それをを用いることで、アメリカの映像作品に描かれる「プリンセス」と、一見それとは対照的とみなされてきた「戦う女性」が、ともにゴシックの呪縛を帯びた、共通の矛盾・問題点をはらんでいること、またそれが広くアメリカ文化に浸透しつづけている女性像の問題と結びついていることを、アメリカの映像作品の分析を通して、論じるものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、必要な資料・文献を収集し、それらを分析することで、「研究の目的」において提示した研究課題に関する考察を行う。具体的には、19世紀以後の少年少女・若者のための作法書、ゴシック小説、少女向けの小説などの読解・分析・関連付けを行い、映像作品では、「プリンセスもの」、「戦う女性もの」およびそれらに関連する映画・アニメ

メーション・TVドラマシリーズの作品群を収集し、検証・分析・考察を行い、相互に関連付けながらまとめを行う。

#### 4. 研究成果

まず、以前は英国からの輸入が主だったが、19世紀前半には国内で数多く出版されるようになり、大きな転換を迎えたという少年少女・若者のための一連の作法書(コンダクト・ブック)から、女性たちが、「女性の領域」である「家庭」において、いかに優れた母親となることを望まれていたかを確認することができる。少年・少女向けも、若者向けも、作法書は男性・女性向けに別々に書かれ、「己を知ること」・教育・家庭の重要性など、共通して強調される項目が数多くある一方で、結婚後の役割には大きな差があり、男性は良き社会人となるため、女性は良き「母」となるための努力が推奨される。家庭における教育を任される母親は、息子への影響力も大きく、作法書は息子に母を重んじることを諭す。そして、男性用の作法書では、良き母となる女性を選ぶための秘訣が詳しく述べられているのに対し、女性用の作法書では、(男性に選ばれるような)良き母になるために努力すべきことが強調されている。身体的な差を基にして男女には「自然」の差があるとし、別の役割を担うのも「自然」なこととするジェンダー・ポリティクスは、こうした作法書の助けもあって流布していった。

良き母となるための教育と努力、それは男性に選ばれるための教育と努力であり、よりよい結婚を求めることに女性を向かわせる。当時の少女向け小説においてもまた、女性の「立身出世」である「良妻賢母になること」を是とする物語が、苦難や障害を乗り越えるという「努力」をした結果、「結婚」という女性の幸せの第一歩を手に入れるというプロットとともに語られ、受容されていた。困難や恐怖に打ち勝ち、苦労して手に入れる「幸せ」それは、女性ゴシック小説との共通点でもある。少女小説の作家たちはゴシック作品も少なからず手掛けており、そこでは、「家庭」「家族」という女性の居場所が、同時に女性を縛り、閉じ込めるものの象徴として、ジェンダー・ポリティクスに補強されながら、表現されている。

この図式は、現代においても健在であり、この女性を捕らえ、閉じ込めるものとして機能してきた、いわばジェンダーの檻は、現代の作品においても、その根幹に未だ存在していると言える。

まず、19世紀以降の少女のための物語の最もわかりやすい後継者である「プリンセスもの」特にディズニー作品によって広範囲かつ長期間にわたって浸透し、幼少時から女の子たちに着々と「プリンセス願望」を育ててきたジャンル の作品群がある。それらはも

ちろん、時代を追うごとに現代的にアレンジされ、現代では、因習に囚われない、より自由度の高い、自立した女性像の提示を目指しており、主人公は、複数の選択肢から自分の意志で道を選んでいるように見える。しかし、物語の目指す結末は依然として変わらず、それゆえ彼女が選ぶ道は予め決まっていた、結局はその道中に若干のヴァリエーションが生じたにすぎない。

それはまた、構造のわからない迷宮の中で彷徨わされながら、それでも主人公は、努力の末、自力で脱出したと思っているが、実は自分以外の力の思うままになっていたという、ゴシック的な囚われの状態と酷似している。

一方、「戦う女性もの」特にハリウッド映画によって流布し、「強い女性」像を提示し、「女性が強くなったこと」を印象づけてきたジャンル の作品群は、主人公に強さを与え、戦わせることで、女性の能動的な面を強調し、また「女性の領域」を逸脱させることで、女性の自由度が増していることを示そうとしている。それはいわば、「プリンセス」と対極にあるように見える女性像である。しかし、主人公が戦いを全うした末に得られるご褒美は、アクション映画であれ、SF映画であれ、社会派ドラマであれ、プリンセスものと同様、「恋愛パートナー」である。「女の領域は愛」「愛こそは全て」という概念は、主人公がどれほど「男性並み」になろうとも「強さ」を得ようとも、女性から切り離されることはない。

「戦う女性もの」は、ハリウッド映画で、特にシリーズ化されて数多く作られた後、現代ではTVドラマシリーズとして、大量生産されている。男性と同等に認められて働くことのできる医師や弁護士、刑事などとして、女性の主人公が活躍するものが多く、彼女は同僚たちと、時に対立し、時に協力し、困難に立ち向かう。人気が出なければ途中で打ち切りになるが、好評であれば数シリーズに渡って継続するため、主人公もその仲間も、映画に比べて、その内面や関係性を丁寧に掘り下げることができる。主人公に「相棒」が存在し、その関係性が物語を進める上で重要となる「刑事もの」では、かつては男性のみのものであった「パディ」関係を、男女の組み合わせ、あるいは女性同士にすることで、また女性を「上司」に設定することで、物語のヴァリエーションに多様性が生じている。しかしその関係性や設定は、男性(同士)を基本としていることに変わりはなく、「定番」となるには、さらに時間を要すると思われる。

「戦う女性もの」のTVドラマシリーズとしては、「ヴァンパイアもの」も人気のあるジャンルとなっている。ホラーの二大元祖物語である『フランケンシュタイン』と『ドラキュラ』のうち、前者は人造人間についての、女性(母)を排除した物語であるのに対し、ヴァンパイアを描く後者では、従来から女性は重要な役割を果たしてきたが、現代のドラマ

は、女性が犠牲者となる物語ではなく、ヴァンパイアとの恋愛、あるいはヴァンパイア同士の恋愛模様が主軸であるために、女性が主体的に中心となって、愛するものを守るために戦う物語となっている。しかし、「女の領域は愛」「愛こそは全て」という概念は、ここでも通底している。

一方、「プリンセスもの」では、「おとぎ話」の語り直しや、パロディ、そして物語の横断(インターテクスチュアルな物語)が、まずは映画で作られるようになり、次いでTVシリーズでも採用されている。従来の女性像を、おとぎ話を利用しながら、現代の女性と対比させる手法は、上手く作用していないものや、「おとぎ話」を使う意味が薄れてしまっているものもあるが、そのわかりやすい新しさが受容されている。アニメーションのシリーズにおいても、この物語の横断は頻繁に行われており、かつての物語の新しい需要のされ方として定着し始めている。しかしながら、こうした物語の土台には、19世紀以来の、ジェンダー・ポリティクスに補強され、女性を捕らえてきた女性ゴシック的な呪縛が、時に目立たない形で、時に強力な鉄格子のように立ちだかるジェンダーの檻として、依然として存在している。

「プリンセスもの」を世に広めたディズニーは、プリンセス以外の物語においても、女性主人公に制約を与えている。『ピーター・パン』では梓役だった妖精ティンカー・ベルは、自らが主人公となった「ティンカー・ベル」シリーズでは、従来の女性像に囚われない、自分の信念に従って「戦う女性」さながらに行動することのできる存在として、魅力的に描かれているが、彼女でさえも、その自由は期限付きのものであり、「プリンセス」と「戦う女性」の2つの女性像と同様に、女性を囚われの状態に置こうと仕向けるゴシック的呪縛の中にいることを、女の子たちはさらに幼少時から教えられていることがわかる。

以上のように、本研究は、少女及び女性のための物語の中でも、影響力の大きい映像作品(映画・アニメーション、TVドラマ)を扱い、アメリカ文化において「プリンセス(願望)の物語」と「戦う女性の物語」が、一見対極にある女性像を描いているようでありながら、同じ制約のもとで、共通の矛盾を抱えていることを、ゴシック性、とりわけ女性ゴシックの物語がもたらす呪縛という観点から分析することで明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

## 照沼 かほる

「主人公になったティンカー・ベル 『小さな妖精』の挑戦と限界」  
『行政社会論集』第27巻第3号  
(2015年2月) 査読有  
福島大学行政社会学会 39-76

## 照沼 かほる

「『フランケンシュタイン』の遺産 『人造人間』たちの表象をめぐる」  
『NEW PERSPECTIVE』第199号  
(2014年7月) 査読有  
新英米文学会 41-54

## 照沼 かほる

「ラプンツェルの『冒険』 ディズニー・プリンセスのゆくえ2」  
『行政社会論集』第24巻第4号  
(2012年3月) 査読有  
福島大学行政社会学会 59-92

[学会発表](計1件)

## 照沼 かほる

「『フランケンシュタイン』の遺産」  
新英米文学会12月例会(2013年12月15日)早稲田奉仕園セミナーハウス  
(東京都新宿区)

[図書](計1件)

## 照沼 かほる

「戦うプリンセスたちの挑戦 プリンセスと戦う女性と女性ゴシックの関係」  
吉田迪子他『ターミナル・ビギニング アメリカの物語と言葉の力』  
論創社、2014年 257-283

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

照沼 かほる (TERUNUMA, Kaoru)  
福島大学・行政政策学類・准教授  
研究者番号:60312766